

学会賞（熱物性賞・論文賞・奨励賞）について

表彰委員会委員長 牧野俊郎

2010年1月に表彰委員会委員長を仰せつかりました。それから1年を経て、賞と委員会の実務について、それまでより詰めて考えるようになりました。つきましては、委員会の幹事・委員のご意見も伺って、委員長からコメントします。ネガティブなコメントを含むものですが、その趣旨は、より多く賞への応募・推薦をいただきたいというところにあります。よろしく願いいたします。

学会賞（熱物性賞・論文賞・奨励賞）

これらの賞を授与することは、学会にとっては、自らのステータス、ポテンシャルを確認する重要な事業であり、受賞者にとっては、名誉・生き甲斐のみならず今後の昇給・昇任にも関わる重要なものであります。ついては、委員長は、この学会には優れた研究が多くあるのに、なぜか賞への応募が少ないことを案じています。皆さんが謙虚でいらっしゃるのでしょうか、あるいは賞に応募・推薦して授与されなかったら体面が保てないとお考えでしょうか。いいえ、賞に応募・推薦しないのは美德ではありませんし、授賞に至らなかった分^(*)が公表されることもありません。ぜひ、応募・推薦して下さい。

賞の審査・選考のプロセスについては、非公開事項^{(*)、(2)}を除けば、基本的に秘するところはありません。ただ、これらの点について広報が十分でなかったのも確かです。以下にはそのあたりについて記します。

表彰委員会（for 熱物性賞・論文賞・奨励賞）

この委員会は、委員長1名、幹事1名、委員4名の計6名からなります。このうち幹事・委員の計5名が、提出された5セットの応募・推薦書類に基づいて賞の審査に当たります。幹事・委員の名^(*)は委員会の中でも非公開とし、審査は5名の各人が独立に行います。

委員長は、審査には加わらず、幹事・委員の審査結果(評点と意見)に基づいて幹事と協議のうえ授賞候補を選考し、幹事・委員の審査結果と委員長の選考結果を幹事・委員の1名ずつに示してその同意を求め、受賞者・受賞論文の委員会案を最終決定します。そのため、委員長だけが会員への窓口になります。賞に関して不明の点は委員長にお尋ね下さい。非公開事項に繋がるものでなければ、お答えできることもあるかと思います。

熱物性賞について

この賞は、明文化されてはいませんが、学会の歴史を経て、

研究者・技術者のライフワーク的な一連の研究に対して、お一人に1回だけ贈られるものになってきました。そのため、委員会は、この賞を、どのような方々にどの時機にどのような順で贈るのがよいかを、何年か先までを見て考えるべきであるかと思っています。その意味で、この賞は論文賞や奨励賞とは性質の違うものであると理解しています。

論文賞について

本号の賞の募集のページに示すように、論文賞は、会誌の論文のみならず本学会のシンポジウムの講演論文も授賞の対象とします。実際に、シンポジウムでは優れた研究であると思われるものが多く見られます。ただ、シンポジウムの講演論文が単独で提出されても、論文賞の授賞に至ることは希です。あるいは、授賞に至るには審査を経た論文の添付が実際上不可欠になります。すなわち、賞の審査に当たっては、必ずしも熱物性のその個別分野の専門家ではない幹事・委員が、その研究が学術研究として間違いのないものであることを前提として、その研究が熱物性研究のなかでさらに光るものであるや否やを評価します。ついては、シンポジウムの講演論文が、審査を経た論文の研究を基礎とするものであることが明示されることが重要になります。この点は、奨励賞についても同様です。ご理解いただき、より多くの応募・推薦をいただきたいと思っています。

奨励賞について

奨励賞は、将来が期待される若い方を励ます賞であり、くり返しますが、受賞者には名誉・生き甲斐を与えるのみならず、その方の昇給・昇任にも関わる重要なものです。大学の教授・研究所の上司には、若い方をこの賞に推薦できる人に育て、賞に推薦することも義務であると思えます。いっぽう、学会の論理もあって、本学会は、ストレートにいうと、本学会のシンポジウムで複数回の発表した実績のある方の応募・推薦をいただきたいと思えます。優れた方であっても本学会での活躍が明に認められない方については、その方を表彰すべきは本学会ではなく他の学会であろうと考えることがあります。

若い方が自主的に賞に応募されることはなかなかないかと思えます。大学の教授・研究所の上司には、よろしくご配慮のほどをお願いいたします。前年以前に選に漏れた方でも、年齢制限の範囲なら、それ以降の業績も示して再挑戦していただくのもよいかと思えます。ご検討下さい。